

僕がゲイでよかったこと

平良愛香（日本基督教団三・一教会牧師）

平良愛香と申します。私は立教大学での全学共通カリキュラムで「性倫理とキリスト教」という授業を持っています。みなさんの中にもすでに履修したという人もいるかもしれませんがね。単位をとりやすいということでも有名になってしまっているためか、履修希望者がたくさんいて、授業の運営や成績付けが大変ですけど嬉しいです。授業では「性はこうあるべき」という価値観が社会にはびこっているということや、その背景にキリスト教が少なからず影響を及ぼしているということ、そして、果たしてその価値観は「正しいのか」ということを学生に問いかけることをしています。特に前半は性（セクシュアリティ）の多様性と社会の非寛容について。性的少数者は「いないのではなく、命がけで隠さなければ生きていけない社会であることが問題なのだ」ということを知ってもらったり、それぞれ自分のセクシュアリティに向き合ってもらうことを目的としています。また、後半は性関係の多様性について。合意のない性関係がいかにも暴力であるか、ということをお伝えすると同時に、「性暴力を受けたことによって『傷もの』になる、という思想も大変な暴力である」ということをお伝えしています。逆に、結婚を神聖視したり、セックスの絶対条件としたりすることから出てくる弊害、問題点などについても扱っています。そういったこともあって、今回、ジェンダーセッションでも話してもらいたい、ということでお招きいただきました。そこで今回は、一番みなさんにお話したいことをタイトルとして選びました。「僕がゲイでよかったこと」なかなかインパクトのある題ですね。大学の門に近づいたら、どーんと大きな縦看板に「僕がゲイでよかったこと」と書いてあったので、我ながらそのインパクトにのけぞりそうになりました。

（本題に入る前に、性を現す sex, gender, sexuality という言葉の違いの話。「オカマ」というのは定義がなく、あえて言えば「男はこうあるべきで、それにそぐわない、男のなり損ない」といった蔑みのことばである、ということ。Homosexual という医学用語の意味と、それを Homo と略したときに起こる差別。Gay という言葉が生まれた背景。使っている人によって意味が異なるのに、誰も確かめようとしていないこっけいさと無責任さについて短いレクチャーを行った。）

さて、僕は小さい時よく女の子に間違われる子でした。見た目も女の子っぽかったうえに名前が「あいか」で、これは沖縄の歴史を踏まえ両親が付けてくれたのですが、そのせいで友だちから「お前は本当は女だろ」とよくからかわれました。その度に親からは「その子たちがあんなの良さを理解できないだけ。卑屈になることはない。神さまはあなたをあなたとして創ったんだから自分らしく生きていきなさい。神さまがどうやって生きていってほしいと思っているのかよく考えていきなさい」と言われていました。また、僕は泣き虫だったのですが、兄たちからは「男の子だったら泣くな、と世間がいうのは間違っているが、お前はうるさいから泣くな」と丁寧には叱られていました。そもそも、人と違うことは喜ばしいことであると両親や家族から徹底的に教えられました。物を買って欲しいときは「みんなが持っているから欲しい」では買ってくれず、「誰も持っていないから欲しい」と言ったほうが買ってもらいやすかったですし、風邪を引いて学校を休んで寝ていたりすると、「今日はみんなと違う一日の過ごし方を

していかっこのいいと褒められたものです。ですから、「女の子っぽい」と言われてもさほど気にせず、むしろ「男らしさよりも自分らしさ」人と違うことを誇りに思って成長していきました。

小学2年生の時に家庭訪問があって、(男の先生)「愛香君はもっと男の子らしくしたほうがいいですね」と言ったので母親が思わず「男の子らしくなれというのは髪を短くすることなのか、もっと乱暴になれということなのか。この子はこの子のままでいいのだ。」と怒鳴ったんです。「男の子らしくならなければならないという価値観は必ずしも正しくはない」と感じました。それからあるとき、スカートをはきたくなかったことがありました。女の子になりたいわけではなかったのですが、試してみたかったのかもしれない。母親に言ったら「困ったわね。あなたに合う大きさのスカートは無いの。だから縫いましょう」と生地屋さんと一緒にいき、そこで僕が気に入った、お星様がたくさんプリントしてある紺色の生地を買ってスカートを縫ってくれました。そのまま「遊びに行っちゃい」という親に、「はい」と遊びに行ってしまう僕。面白い家庭ですね。この話を大人になってからあちこちですると、とてもうらやましがる人たちがいました。いわゆる「性同一性障害」の人たちです。「自分も子どもの頃からスカートをはきたかった。でも叱られると分かっていたからできなかった。」と。そして異口同音に、「お小遣いをためて買ったことはあるけど、一回だけはいてみて、それから罪悪感からゴミ箱に捨てた。」そんなことを言うのです。そして「平良さんのところは、周りがどう見るかではなく、子どもがどうしたいかを大切に考えてくれたんだね。うちはそうではなかった。」といわれました。僕は本当に自由に育てられたなって思います。

人と違うことはすばらしいことだと教えられて大きくなってきたのですが、こんなに違っていいんだらうかって思ったのは中学に入ってからです。思春期になって大抵の人は異性を意識するようになります。でも僕はいつまでたっても異性を意識する気配がありませんでした。男の子たちが集まって、どの女の子がかわいいとか噂話をしていても、「それがどうした」という感じでした。またキリスト教の中学校だったので聖書の授業があるのですが、その中でイエスキリストの言葉として「情欲を持って女を見るものは、既に心の中で姦淫を犯しているのである」という言葉に出会うと、多くの男子生徒が放課後語り合っているのです。「俺、今日も姦淫しちゃったよ」と。それを聞きながら、「みんななんて節操がないのだらう。僕は情欲を持って女を見たことなんて一度もないぞ。僕は清いのかな。」なんて考えました。実は情欲を持って男を見ていたのですが。

やがて、これって困ったことなのかなと思って一生懸命本を読み始めました。「思春期になると男の子は女の子を、女の子は男の子を意識するようになります。これは自然なことです。」それは行間を読むと、「同性を意識するのは、自然じゃないんだ」と読めます。一冊だけ「ごく稀に同性を好きになることもあります、一時的なことです。心配ありません。」と。でも自分で分かるんですね。「これは一時的ではないなあ」と。最近減りましたが、少し前まで、自分が同性愛者であるということを話すと、「いつからなったのですか」みたいなことを聞かれることがよくありました。「そういうあなたは、いつから同性愛者なんですか」と尋ね返すと、たいていの人は困ってしまい、「物心付いた頃にはそうだったなあ」と言うのですが、私も「気が付いたらそうだった」としか言えないのです。しかも自分の、同性に惹かれるという感情は、一時的ではなく、変わらずに一生続くのだな、という実感もあります。すると「一時的なことです。心配ありません」という言葉は「一時的でない人は心配して下さい」と書いてあるように読めてしまうのです。心配し始めました。

もっと不安になったのは高校生になり、青年期を迎えて「自分は何者で、どう生きていったらよいの

か」と考える時に、もしかして僕は同性愛者ではないかと思い始めました。でも当時、僕の中にある同性愛についての知識は非常に偏ったものでした。「異性とのセックスに飽きた人が、刺激を求めて同性愛に陥る」とか、「異性にもてない人が、しかたなく同性にセックスを求めて同性愛になる」とか。まったく矛盾する二つの教えを、どこかで鵜呑みにしていたのです。だから僕は同性愛者ではない、と思いつまうと。けれど、どう考えても異性よりも同性のほうに心が引かれる。いつしか「同性愛」というのは自分を当てはめる言葉だと受け入れざるを得なくなっていました。しかし、そのころ同性愛について書かれた本には限界があって全部異常性欲、性的倒錯と書いてあったんです。多くの紙面を割いているのは原因論でした。同性愛の人はお母さんのお腹の中にいる時にストレスがどうの、ホルモンがどうのとあったんです。中には「どこどこの大学では、同性愛のショウジョウバエを発生させるのに成功した」とか。私はショウジョウバエと同格なのだろうか、と。これからどう生きればいいのか知りたい、と思いつているのに、原因論ばかりを読んだ当事者は「あなたは間違っただけで生まれてきたんです」と書かれているように受け止めてしまうのです。これは先天的な「障害」を持って生まれた人も同じようなことを言っていました。自分のこれからのヒントが欲しいのに、原因論ばかり示されていると「こうしていればこうならないで済んだのに」と言われているようで、生きていくことを肯定されていないような気がする、と。よく似ていますね。治療法について書いてある本もありました。同性のポルノなどを見せて、興奮してきたら電気ショックを与える、と。これは治療というより拷問ですよ。現在でもやっている国はあるようですけど。それを読んで絶対同性愛者だと人に知られてはいけなかつと思つました。知られたら病院に引きずって行かれかねませんから。

同性愛は国によっては犯罪である。死刑になる国もある。そういう記述もありました。現在でもイランやサウジアラビアでは同性愛者は死刑になります。日本に生まれてよかった。そうかもしれない。でも余談ですが、少し前に、日本に難民申請をしていたイラン人の男性同性愛者がいました。日本に出稼ぎに来ている間に、同性愛者としてのアイデンティティを確立して人権活動にも参加したが、ビザが切れてしまい、いま本国に帰ると命の保証が無い。だから難民認定してくれ、と。日本の裁判所はそれを拒絶しました。「イランに帰っても殺されるとは限らない。同性愛であることを隠して生きればいい。」と。判決がでたとき、彼の前で本当に土下座したい気分でした。日本は同性愛者を死刑にはしませんが、見殺しにする国なのだと思つました。幸い彼は、北欧のある国が受け入れを表明してくれたのでそこに亡命できましたが。

またキリスト教の信仰も持っていたので、キリスト教の本もいろいろ読みました。しかしそこには、「神の創造の摂理に反する、救いようのない罪」と書いてありました。私は生きてはいけなかつと思つました。何度も生きることを断念しよう、と。ただ小さい頃から言われていた「あなたはあなたとして創られたんだから精一杯自分らしく生きていけなかつといけなかつ」「世界中の人が自分の敵になつたとしても、イエス様だけは味方であることを忘れてはならない」という言葉によって「死んではならない。けれど一生隠していこう」と決めました。高校生の頃です。

でも、こんなに大きな悩みを抱えているのに、だれにも話せない、というのはとても苦しいものです。自分はもう壊れかけていました。「誰か助けてくれ」という中で、初めて親友の一人に、自分は同性愛者なんだとカミングアウトをしました。「僕は男の人が好きなんだ」とひとこと言うのに、1時間かかりました。あまりにも切羽詰った雰囲気だったので、彼もじつと待っていてくれましたし、カミングアウト後も「僕にとって愛香はいままでと同じ愛香だよ」と言ってくれました。最初のカミングアウトを受け止めてもらえて本当によかつたと思つています。知人の中には最初のカミングアウトを失敗

したという人も何人もいます。信頼できると思って話したのに、「気持ち悪い」といわれたり、一生向き合っていく話をしているのに「大丈夫だよ、治るよ」と、受け入れてもらえなかったり、理解してくれたようなそぶりを見せながら、だんだん距離をとられたり、他人にばらされたり。僕は友人に恵まれたなあ、と思います。実際カミングアウトというのは命がかかっています。失敗したら、友人を失うどころか、自分の生きる場を失うかもしれない。生きていけなくなるかもしれない。それがカミングアウトです。最近テレビなどでやたら「カミングアウト」と言う言葉が使われていて、たとえばお笑い芸人が「昔アイドルやってました」という暴露話をして、みんなで盛り上がるようなときに、「カミングアウト」と使ったりしていますが、なんか違うなあ、と感じます。失敗したら死ぬかもしれない。そんな重さがカミングアウトという言葉にはあります。誰か助けてくれ、そういったSOSが僕の第一段階のカミングアウトだったんです。

さて、この親友に初めてのカミングアウトをしてから、僕は随分楽になりました。いままで苦しんでいたことを彼には言えるようになったし、なによりも苦しんでいないふりをしなくてもよくなったからです。好きな女性タレントの名前を聞かれてウソをつかなくてもよくなったし、好きな男子の話もできるようになりました。そうすると、僕は他の親しい友人にも本当のことを知って欲しいと思うようになってきました。悩んでいないふりをしたくない。ウソはつき続けたくない。親友なら、僕の本当の姿を分かってもらいたいと思うようになったのです。そうやって少しずつカミングアウトする相手が増えてきました。本当の僕を知って欲しい、あなたの知っている平良愛香は、実は本物ではなくて、これが本当の自分なんだよ、親友だったらそれを受け止めてほしい。それがカミングアウトの2段階目の理由でした。

そうすると面白いことに、相手に期待する反応が少し変わってきました。最初のカミングアウトでは「僕にとって愛香はいままでと同じ愛香だよ」と言われて嬉しかったのですが、2段階目になると「同じ」と言われると、「ちょっと違うんだよなあ」と感じるようになってきたんです。「今までと同じではないんだよ。違うということを丁寧に受け入れて欲しいんだよ」と。これは、在日の人たちが全く同じことを言っていました。「わたしは今までは日本人として日本名で生きてきたけど、あなたには本当の私を知っていて欲しい。私は実は在日韓国人で、本名は〇〇というんですよ」と言ったときに、「そんなの関係ない。今までと同じだよ」と言われるとがっかりする、と。「今までとは違う私を知って欲しい」と勇気を出して言っているのに、違いを無視されたような、本名宣言の重さを受け止めてもらえなかったような体験をしてきた、と。おんなじだなあ、と思わされます。

高校では何人かの親友にカミングアウトできて、苦しみながらも、いい友人に恵まれたなあと思います。どうやって生きていったらいいのかということ冷静に考えられるようになったし、たくさんの恋愛もしました。全部片思いですけど。ときどき「ゲイの人は異性愛の男性を好きになってしまうことはないんですか」と聞かれることがありますけど、ありますよ！たくさん！ただ、ほとんどの場合告白しません。せっかくいい友人でいるのに、告白した途端「気持ち悪い」と言われて、関係が切れてしまう危険性がありますから、そんなリスクを負うよりも、だまって片思いすることがほとんどですね。

高校を卒業してから、僕は3年間フリーターをしました。その間にとっても大きな経験をしました。ゲイ雑誌との出会いです。ある古本屋さんに入ったとき偶然手にしたのが、男性ポルノも載っているゲイ雑誌だったんです。とても驚きました。こんな本がこの世の中にあるのか、と。すぐに買うことはできませんでした。買っているところを人に見られたら、自分は生きていけないと思いましたから。でもど

うしても欲しくなって、ある日とうとう買いました。買ったのはいいけれど、読める場所がありません。読んでるところを人に見られたらどうしよう、と。さんざん場所を探して、ようやく見つけたのはサトウキビ畑の中でした。サトウキビって収穫が近くなると3~4mにもなるので、中に人が入ると全く見えなくなるんですね。それで買った雑誌を持って入っていった。でももしかしたら草刈りのオジイがいるかもしれない、と思って、もっと奥に奥に、と進んでいったら、反対の農道に出てしまって、あら行き過ぎた、とまた戻って、「このあたりだったら絶対人に見られない」という場所で、それでもおどおどしながら、初めてゲイ雑誌を読んだんです。超ドキドキでした。なんと言うか、嬉しいというか、興奮というか。でも問題はその後でした。家には持っていきません。見つかったら困るから。どんなに丁寧に隠しても、何かの弾みで見つかるかもしれない。何かの間違いで警察の家宅捜査が行われたら見つかってしまうだろう。もし家が火事になって、そこだけ焼け残ったら、どうしよう。そんな非現実的なことまで考えてしまい、家には持って帰れませんでした。そこで仕方なく、近くの公園のゴミ箱に捨てたんです。買ったばかりのゲイ雑誌を。しかも、捨てる場所を見てた人がいたら困ると思い、雑誌を細かく裂きました。それどころか、裂いた雑誌を拾ってパズルのようにして見る人がいるかもしれないと思い、裂いた雑誌をいくつもの袋に分けて、わざわざ別の公園のゴミ箱に捨てたんです。今考えると、「そこまでやらなくても」と思いますが、そのときは必死でした。自分で信頼して選んだ人にカミングアウトすることはできますが、「ばれる」ということは「生きてはいけなくなること」だと本気で思っていたんです。

けれど手元にゲイ雑誌がなくなると、また欲しくなる。「捨てなきゃよかった」と。それでまた古本屋さんに行ったら、またあった。しばらくその繰り返しでした。やがて、少しずつ慣れてきて、落ち着いて読めるようになってきました。そうすると、ポルノのグラビアやマンガや小説だけでなく、他の文章にも目が行くようになってきました。東京では動くゲイとレズビアン会という団体が、東京都を相手取って裁判を起こしている、という記事や、同性愛の人はどの地域にも、どの年代にも、どの世代にも一定の割合生まれているのだということを知りました。ときどき、「アメリカに多いですね」と言われることがありますが、べつにアメリカでは同性愛者がたくさん生まれているわけではありません。たまたまアメリカがカミングアウトする人が増えている、しやすい国になってきている、というだけのことです。先ほども話したように、同性愛であるというだけで処刑されるような国もあるのですから、そういった国ではカミングアウトできるわけありません。でもそういった国でもある一定の割合生まれているのは事実なのです。また、雑誌には文通欄もありました。友達求む。恋人求む。セックスフレンド求む。そういった相手求むという人が何百人もいて、「こんなにたくさん仲間がいるのだ」ということに驚かされました。そもそも雑誌があること自体、ニーズがあるということです。古本屋にあったということは、この雑誌を買って読んだという人がいるということだ。この沖縄にも仲間がいる。いつか仲間に会いたい。そんな想いがだんだん募ってきました。ちなみに文通欄といっても住所や連絡先は載っていません。連絡を取りたい相手の番号を封筒に書いて、出版社に送ったら、相手に転送してもらえる、というシステムでした。ただ僕が持っていたのは全て古本だったので、回送期限が過ぎていて送ることができませんでした。まあ、過ぎていなくても送る勇気はなかったと思いますが。そんな中で、こんなに仲間がいるなら、同じセクシュアリティの友人が欲しい、恋人が欲しい、セックスもしたい。とてもそう思うようになりました。でも見つけられませんでした。何故か。僕が命がけで隠していたように、周りの同性愛者たちも命がけで隠していたからです。実は、僕がカミングアウトしてから、「実は僕もそうだよ」と言ってくる人が回りに何人も出てきて、「なんだ、こんな近くにいたのか」とこっけいに

もなったのですが、自分で隠している間は、やはり出会えないものです。よく「同性愛者と会ったことがない」と言い切る人がいますが、本当は「会ったことがない」のではなく、そばにいても気がつかないだけなんです。日本のクリスチャンは人口の1%だと言われます。同性愛者は本人が気づかない人も含めれば3%はいるとも言われるので、クリスチャンの知り合いがいる人やクリスチャンを見かけたことがある人は、その3倍の確率で同性愛者を見ていることになりますよね。僕は、いつか出会いがあることを心から求めつつ、3年間を沖縄ですごしました。

さて、それから僕は勉強したいことが見つかったので、群馬県の短大に進学しました。旅の恥は掻き捨てと言いましょうか、親元を離れて大胆になったと言いましょうか、「さあ、今度こそ彼氏をなんとかして作ろう」と思い、ある作戦に出ました。彼氏作り大作戦です。(どんな作戦を使ったかは、講演では話して会場を盛り上げたが、紙面では割愛。あしからず。) 何度も作戦を繰り返しては、「残念」を繰り返していました。その中である一人の男性と出会いました。友人の友達で、友人の家に遊びに行ったとき出会ったのですが、「ちょっとすてきななあ」と。その日のうちに意気投合し、一緒に食事に行ったり、彼の車でドライブに行ったりして、何時間もおしゃべりを楽しみました。いつしか「僕はこの人が好きだなあ」と思ったし、「きっと彼もゲイで、僕に好意を持ってきているに違いない」と思うようになったのですが、でも本当に相手がゲイであるかどうかは尋ねないといけない。そしてそのためにはこちらもカミングアウトしなければならない。一方的に相手に「あなたはゲイですか」って聞くのは失礼ですから。でもカミングアウトって、失敗したら関係性が壊れてしまう。「そんな目で俺を見たのかよ！」と車から蹴り出されてしまうかもしれない。でも確かめたい。そんな切羽詰ったデート？ でした。でもとうとう夜が明けてきて、そろそろ帰らないといけないとなったとき、車をどこかの畑の農道に止めて(農道に縁があるようですね)しばらく二人で、彼が運転席、僕が助手席に座って夜が明けるのを一緒に見ていたとき、「今確かめないと、二度と会えないかもしれない」と思ったんです。そこで意を決して彼に、カミングアウトしました。「実は僕はゲイなんだ」って。そうしたら運転席の彼もぽつんと「僕もだよ」って。初めての彼氏になりました。もしかしたら皆さんの中には「そんな相手も良く知らないのに彼氏になるなんて」と思う人もいるかもしれませんが、20年以上「恋人が欲しい」と思い続けていて、そんな中で「この人は好きになってもいい」とお互いに想えるという人と初めて出会って、しかも「今付き合わないと、一生チャンスがないかもしれない」と思ったら、恋人になるのは自然だと思いませんか。

さて、この彼は、人権意識の高い人でした。彼は「同性愛は性の問題であるだけでなく人権の問題である」って教えてくれたんです。そして「日本が同性愛者にとって生きにくいのは、キリスト教が入ってきたせいだ。おまえクリスチャンだろう。何とかしろ」って言われたんです。そりゃないよ、とは思いましたし、実際には同性愛者が生きにくくなったのは明治時代天皇制を頂点とした家父長制が押し付けられ、そぐわない者が弾圧されたということが原因のようですが、僕はキリスト教徒として何かしないといけないと思うようになりました。実はその一言が牧師になる最初のきっかけの一つだったように後になって思います。また自ずと人権の問題として考えられるようになり、たとえば短大とかで人権の話をしているときに、「同性愛者の人権もないがしろにされているよね」と自然に言えるようになってきました。ところがそういうと周りの人がびっくりするんです。「えっ？ 同性愛者の人権？ でも、普通いなくてしょ。平良さんは見たことあるの？」みたいな。ある人は「東京にはたくさんいるかもしれないけど、群馬にはいなさそう」とか、「平良さん見たことあるの？ わたしも見てみたい！」とか。そん

な会話の中で、同性愛者はいないと思われているようでは差別は無くならないと思い、僕のカミングアウトが3段階目に入りました。「同性愛者はあなたの目の前にいますよ。気付いて下さい、差別しないで下さい」と。

そのころキリスト教と同性愛について一生懸命考え、学び、アメリカの方で新しい神学が生まれ、同性愛者も神さまに創られて祝福されているんだということを丁寧に書いてある文章も読めるようになりました。そしてある日行っていた教会の牧師にもカミングアウトすることができました。その牧師がとても喜んでくれたことで本当にほっとし、そして「それなら同性愛者の牧師がいたっていいじゃないか。むしろそういう人がいてこそ、多くの同性愛者が救われるのではないか。」と思うようになったんです。

やがて僕は牧師になろうと思って東京に来ました。(実はなりたい別の職業もあったが、それを断念した経緯については割愛。)そこで、かつてゲイ雑誌で読んだ、裁判をしているという同性愛者の人権団体「動くゲイとレズビアンの会(通称アカー)」に入りました。いろんな人と知り合える中で、やっぱり日本中に孤立している仲間たちがたくさんいる、ということ、そして、キリスト教に触れてしまったために自分は不必要な存在だと思込まされている人たちがたくさんいることを実感しました。そこで私のカミングアウトが4段階目を迎えました。「あなたは一人ぼっちではないんだよ。仲間がいるんだよ。キリスト教によって苦しめられている人もいるかもしれないけど、神様は私たちをありのままによしとしているんだよ。」そういったエールを送るとというのが、カミングアウトの四つ目の目的、4段階目となったのです。

そんな中から、1995年9月、何人かの仲間たちと一緒にセクシュアルマイノリティーのクリスチャンの集いを立ち上げました。その集いに集まってくる人たちを通して、キリスト教会がいかにかに独善的、排他的であったか、ということを知ると同時に、セクシュアリティーがいかにかに多様であるか、男と女の2種類でもないし、同性愛者や異性愛者だけでもない、男にもいろいろいるし、女にもいろいろいるし、どちらかに分けることでもない人もいろいろいる。セクシュアリティーは実に多様であるということが出会いの中で分かってきたんです。

短時間で話すのは少し乱暴になってしまう恐れがあるんですが、図を書いて説明したいと思います。(ここからは図を書きながら説明)人間には雄と雌がいます。生物学的性です。人間の場合は医学的性と言う事ができます。雄の多くは自分が男性だと思っており、雌の多くは自分が女性だと思っています。これを性自認(Sexual Identity)といいます。雄の身体をもって生まれても性自認は女性だという人やその逆の人もいますね。トランス・ジェンダーとかトランス・セクシュアルと私たちは言っています。さて、雄の身体をもって生まれ自分は男と思っている人の多くは女の人が好きです。雌の身体をもって生まれ自分は女性だという性自認の人の多くは男の人が好きです。これを性的指向(Sexual Orientation)と呼びます。僕のように雄の体をもっており、自分も男性であるという性自認があり、かつ性的指向が男性に向いている人もいます。男性同性愛者です。雌の体をもって、性自認も女性で、性的指向も女性の人には女性同性愛者ですね。ちなみに性的指向の「指向」といういう字は、基本的に「指」という字を使っています。かつては「志向」という字を使っていましたが、「志」だと自分の意思が入ってきてしまう。けれどこれは自分の意思とは関係ない、そういうことをはっきりさせるために、最近では「指」という字を用いています。このことについてはまた後で話そうと思います。

さてでは、雄の身体に生まれ、性自認が女性の人の性的指向は男女どちらに向いているのでしょうか。

これは「当然男性に向いている」と思われる人が多いようですが、実際は両方います。例えば、男に生まれて、女が好き。でも自分は男性だと思えない。どこかが間違っているのではないか。そういったことで苦しんでいる人たちもたくさんいます。男から女に「なった」人はみんな男が好きなのだ、というわけではないことを知ってください。性自認と性的指向はまったく別の事柄なんです。

また性的指向は男性か女性に向いているとも限りません。両方に向いている人もいます。バイセクシュアルの人たちです。バイセクシュアルといっても、男も女も5対5で好きになるとは限りません。7対3かな、という人もいますし、9対1という人もいます。100人好きになる人がいたら、一人ぐらい同性が含まれる、という人もいます。そういった人もバイセクシュアルというかどうかは、本人の自己申告になってくるでしょう。セクシュアリティというのは、第三者が決めるものではなく、自分で決めていくものですから。またバイセクシュアルを「手当たり次第に男とも女ともセックスしたがる人」みたいなイメージで見える人がときどきいますが、たいていのは「そんなことありえない。異性愛者でも全ての異性とセックスしたいと思っているわけじゃないでしょ。好きになる相手の性別が気にならない、たまたま好きになった人が男性のときもあるし、女性のときもある」と説明してくれます。

さらに性的指向が男女どちらにも向いていない人たちもいます。Asexualの人たちです。実は結構多いようですが、これまでは、異性と結婚して子どもをもうけて一人前、という社会の中で、仕方なくそのレールの上を歩んできた、という人が多いようです。そのほか、性的指向が揺らいでいる人や分からないという人もいます。性的指向は完全に二分出来るものではなく、グラデーションがあるものであると知ってください。

では性自認についてはどうでしょう。体に違和感なく、自分は男性だと思っている人、自分は女性だと思っている人、体の性に違和感を持っている人、の他に、どちらでもないと感じている人やどちらでもあるという人たちもいます。「体は男性だけど、男性ではないという性自認がある。かといって女性だというわけでもない」という話もよく聞きます。

こちらも揺らいでいる人や、分からないという人もいます。また、外科的手術をしてでも体を変えたいと感じている人もいれば、そこまでは求めない、という人もいます。性同一性障害という言葉が出てきたとき、「自分は周りから白い目で見られるだけの人間だと思って引きこもっていたけど、ケアの対象だったんだ」と安心して表に出てこれるようになった人たちもいれば、「私の個性に、どうして病名を付けられねばならないのか」と戸惑った人たちもいます。24時間365日一つの性別に縛られるのが苦痛で、ときどき、例えば週末だけとか、違うほうの性で生活している人たちもいます。性自認も単純に二つに分けられないんです。本当に人それぞれです。

では、生物学的分類だけが人間を二分しているのでしょうか？実は医学に携わる人たちの間では常識ですが、インターセックスの人たち（注）がいます。生まれつき男でも女でもない人たちです。男女どちらともいえない性器をもって生まれたり、性染色体と性器が一致していなかったり、あるいは男女両方の染色体を持っていたり、どちらでもない染色体をもっていたり。実は大人になって結婚して子どもが出来なくて病院で調べて初めて、インターセックスであるということが分かる、ということもよくあります。

生まれたときに外性器で男の子か女の子か決めかねたとき、昔はお医者さんが判断して、親にも知らせないまま外科手術をしてしまうことがあったようです。しかしその後、赤ちゃんの性別を親と相談して決めるようになりました。やがて、親たちの中には「この子の性別はこの子に決めさせます」という人たちが出てきました。そこで小学校高学年や中学校に入ったころに、自分の性別を決める子どもも少

しずつ出てきたのです。更に最近になって、自分の性別を決める時期になって、「わたしの性は男か女かのどちらかでなければならぬ」というのは納得いかない。わたしはどちらでもない性のまま自分らしく生きていく」という選択をする人たちも出てきました。ですから実際に社会の中には、男性、女性のどちらかに無理やり人間を当てはめることができない人たちも少なからずいるのです。

そうすると、人間の性は、生物学的性も、性自認も、性的指向も様々なバリエーション、グラデーションがあり、実に、100人いれば100通りの性がある、といえる。にもかかわらず、全ての人間を2種類に分けたうえで、その2つに優劣をつけてしまったのが、性差別なのです。しかも社会はこの端っこの2種類（「体は雄、性自認も男性、性的指向は女性」と「体は雌、性自認も女性、性的指向は男性」の2種類）だけを「正常」とした。なぜなら「子孫を残せるから」です。そのことに気が付いたとき、僕は「セクシュアルマイノリティーのことだけでなく、自分はマジョリティーだと思っている人も、まずは自分の性を確かめて見たほうがいいのでは。そのほうがずっと人間の多様性や豊かさに気づけるんじゃないか」と思い、カミングアウトの5段階目の目的となりました。「あなたの性を見直してみませんか。性ってもっと豊かなものなんですよ」と。

ついでに言いますと、性的指向が「バイセクシュアル」の人たちの中には、「バイという言葉は男女両方、二つという意味があり、人間が2種類しかいないと見ている感じがして自分にはそぐわない。私は男と女だけに性的指向が向いているのではなく、あえていえばどちらでもない人にも向いている。好きになった人の性別が気にならないというだけなんだから」といって新たに「ポリセクシュアル」とか「オムニセクシュアル」という言葉を使い始めた人もいます。また「試してみないと分からない」と言って、「トライセクシュアル」という言葉を使った人もいました。あるトランスジェンダーの友人は、女性から男性として生きることを選んでいたさなか、婦人病で子宮摘出の選択を迫られたとき、「子宮は大切に残しておきたい」と思っている自分に気づき、悩んだ結果、仮に山田さんとしませんが、「わたしのセクシュアリティは山田です」と宣言しました。とてもカッコいいと思いました。また、性的「指」向についても、「自分の意思は含まれていない。自分の意思では変えられない」というニュアンスを嫌がって、「仮に変えられたとしても、変えないでこのセクシュアリティを大切にしたい」という意思表示のために、性的「志」向という字をあえて使う人も出てきました。セクシュアリティって本当に人それぞれですし、自己申告なんです。

僕自身が同性愛者、しかもクリスチャンであったために、社会やキリスト教の「性倫理」「性はこうあるべき」によって苦しめられた後、既成の「性についての考え方」がいかに「狭いものであるか」に気付かされてきました。それは同時に、「性はこうあるべき」ということによって苦しめられている人たちがたくさんいることへの気づきをも与えられました。それは、自分がゲイであったからこそ気づけたことなのではないかと思うのです。子を産むことによるのみ存在を認められる女性たち。家族を養って一人前とされている男たち。役割分担という名目で抑圧されるジェンダー。また、結婚して一人前という考え方は独身者や離婚者を苦しめ、DVを覆い隠してしまったりする。男はこうあるべき、女はこうあるべき、性はこうあるべき、結婚はこうあるべき、という教えや思い込みによって、抑圧され苦しんでいる人や、粹にはめられもがいている人のなんと多いことか！「いや、そうではない。人間は性を含めてもっと豊かな存在であるはずである」そのようなことに気づけたのは、僕がゲイでよかったことだと心から思っています。

同時に、様々なマイノリティーに対しても、心を寄り添えるような気がしています。「多数者・少数

者というだけで社会が生み出してしまう構造的差別の痛み」を共感できますし、そこで苦しんでいるマイノリティーを見つけたときに、何というか、「いとおしい」と感じるようになりました。仲間だ、同士だ、と。これも僕がゲイでよかったことだと思っています。しかし注意しないとイケないのは、そんな社会の中であって、僕自身が差別者になっていることも忘れてはならない、ということです。健常者中心に整備された社会の中で、それに安住している僕は、障がい者をたいてい知らないうちに差別していますし、それを指摘されてもしっくりいかないほどの鈍感さをしっかり身につけています。また、絶対に女性を性的な対象として見ることはないにしろ、女性から見れば、抑圧者である男性であることに変わりはない、ということも、気づかされてきました。ゲイであるから、マイノリティーであるから、弱者であるから、とって、「私は差別していない」と思うのはおごりでしかない。自分がゲイであるからこそ、「差別だ」という声に敏感になれて、逆に差別者でもあるのだ、ということに気づかせてもらいやすいのかもしれない。社会がまだまだ成熟していないから、いろいろな場面でわたしは差別者にも被差別者にもなる。それは実は全ての人にあてはまることではないだろうか。そんなことに気づけるようになったのも、ゲイでよかったことかもしれないと思っています。

最後に一番ゲイでよかったと思うこと。本当にすてきな男性とすてきな恋愛を重ねてこれたことじゃないかなあと思います。マニュアルがあるわけでもない、ノウハウがあるわけでもない。ただ、この人が好き、この人が大切、という中で、どんな関係を作っていけるかを、型にはまらないで、考えていけること。これって、異性愛の人にもやって欲しいと思います。

性って、とても豊かものなんだ、って感じています。

ありがとうございました。

注:インターセックスという言葉は語弊があるということで、日本の医学会では2009年10月に、「性分化疾患」という言葉に統一された。ただ、セクシュアリティなのか病名なのかで今後の議論が必要になってくると思われる。